

認定絵本士養成講座「絵本を紹介する技術」に関する一考察 —ビブリオバトルをもとにコミュニケーションツールとしての視点から—

綾 牧 子

(文教大学教育研究所客員研究員)

One Discussion on the Certified Picture Book Specialist Training Workshop Titled
‘Technique for Introducing Picture Books’:
In terms of Communication Tools based on Bibliobattle

AYA MAKIKO

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

認定絵本士養成講座では、様々な「絵本を紹介する技術」を学ぶ。それらの手法の特徴や共通点・違いについて、筆者のこれまでの授業実践やビブリオバトルに関する研究をもとに整理した。さらに、コミュニケーションツールの視点から考察を加え、「他者に絵本の魅力を伝えるための技術」が、「話し手と聞き手」、「書き手と読み手」との対等な関係性を前提とした「対話」を目指すために用いられるべきことを示した。

1. 認定絵本士養成講座について

筆者の勤務校（彰栄保育福祉専門学校）では、令和4年度「認定絵本士養成講座」（以下、本養成講座）を開設した。認定絵本士養成制度（以下、本制度）は、絵本専門士委員会（事務局：国立青少年教育振興機構）が大学、短期大学及び専門学校等と連携し「認定絵本士」を養成する制度である¹⁾。平成31年度からスタートした制度で、令和4年度は勤務校も含め全国で41校が開設機関となっている。本制度は、平成26年度から開設されている「絵本専門士養成講座」が基盤となっている。「絵本専門士養成講座」を修了し、「絵本専門士」として活躍している方は全国に多く存在している（第1期～第8期における認定者数は495名）。しかし、子どもの読書活動を推し進めていくためには、現在の絵本専門士だけでは十分ではなく、若い世代から関心を持って活動に参画してもらえようとの意図で制度化されたのが本養成講座である。本

制度は、学校（大学、短期大学及び専門学校）の教育課程に位置付けられた授業科目の中で、定められた講座（30コマ、50.5時間）を開設し、学生がその授業単位を修得することで「認定絵本士」の称号を得ることができるものである。認定後は、講座で学んだ知識・技能を活かし、地域や職場で絵本の魅力や可能性を伝え、地域の読書活動を充実させる役割が期待されている。

本養成講座は、絵本を通して心豊かな子どもを育てることを目指し、「絵本に関する知識」、「絵本の魅力を伝える技能」、「豊かな感性」を身に付けることを目標としている。本養成講座を担当する授業者は、カリキュラムに定められている学習内容を教授できることが条件となっており、講座開設を申請する際には、その条件を満たしていることが必須となっている。「絵本専門士養成講座」に準じた学習内容が求められているためである。

筆者は、本養成講座のカリキュラムのなか

で、「絵本を紹介する技術①ブックトークの技術」、「絵本を紹介する技術②書評・紹介文の書き方」を担当した。この学習内容においては、ブックトークやビブリオトーク、ビブリオバトルなどの「話す」技術や、書評や紹介文を「書く」技術を身に付けることが求められている。本稿では、この「絵本を紹介する技術」に着目し、これまでの筆者のビブリオバトルに関する研究を踏まえながら、それぞれの技術の特徴や共通点について探る。特に、これらの技術についてコミュニケーションツールとしての視点から分析するとともに、絵本の魅力を他者に伝えることの意味合いについて考察する。

2. 絵本を紹介する技術

絵本を紹介する技術としては、様々な方法があげられる。ここでは、講座で使用している『認定絵本土養成講座テキスト』²⁾に掲載されている内容をもとに、主な方法について概観する。

(1) ブックトーク

ブックトークとは、1つのテーマに沿って、何冊かの本を紹介する方法を指す。複数冊ではなく1冊だけの紹介でも、場面に応じて行われればブックトークに含まれる。

日本では、小学校などで教師、学校司書、図書館ボランティアが本や図書室に親しんでもらうために行うことが多いようである³⁾。あらかじめ、シナリオを作っておいたり、場合によっては「読み聞かせ」を入れることもある。紹介した本を読んでみたいと思ってもらうことで「子どもと本をつなぐ」ことが目的である。

(2) ビブリオバトル・ビブリオトーク

ビブリオバトルとは、他者にすすめたい本1冊を持ち寄って、本の魅力を紹介し合う「知的書評ゲーム」である。谷口忠大により

大学の研究室の実践から偶然的に開発されたもので、現在では学校、図書館、書店、地域のコミュニティなど多様な場所で行われている。開催のされ方も多様であり、フォーマルな場での開催もあれば、仲間同士で気軽に行う場合もある。

発案者の谷口は、ビブリオバトルのキャッチコピーを「人を通して本を知る。本を通して人を知る。」とうたっている。『『本を紹介する』という自然な活動の中で、発表者の人となり、個性、知識、背景などをコミュニティの中で共有していく機能がある』という⁴⁾。ビブリオバトルには、ビブリオバトル普及委員会より、以下の「公式ルール」が定められている⁵⁾。

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
2. 順番に1人5分間で本を紹介する。
3. それぞれの発表の後に、参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分間行う。
4. 全ての発表が終了した後に、「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員が1人1票で行い、最多票を集めた本をチャンプ本とする。

一方、ビブリオトークは、ビブリオバトルのようなルールは設けずに「自分がおすすめる本を他者に紹介する」ことである。紹介する時間、質疑応答や投票の有無などは、その場の目的や雰囲気に応じて設定される。笹倉は、ビブリオトークを以下のように定義している⁶⁾。

- ① 1人または数人で本を紹介する技法
- ② 本を紹介するときには、作品や作家に対して敬意を払うこと
- ③ 発表時間は3分から5分程度で実施（小学生は3分または4分でもよい）

- ④本の紹介は、書誌事項、あらすじ（解題）、本の書評および感想、お薦めのポイントなど
 - ⑤本を紹介した後、読んでみたい（買いたい）本の人数を調査（挙手または記述で調べる）
 - ⑥本を紹介した後で、紹介者の本を読んでもみたいものが集まり、質問の時間をとってもよい
- （＊⑥は時間がないときは省略しても良い）

ビブリオバトルは、本を紹介した後に投票によってチャンプ本を選ぶが、ビブリオトークは、どのくらいの人が紹介された本を読んでもみたいと思ったかを調査し共有する。そして、各自が読んでみたい本の紹介者のもとに集まって、質問の時間をとる形である。

（３）読み聞かせ、ストーリーテリング（素話）、朗読

読み聞かせは、主に親や保育者などの大人が、子どもと共に絵本などを見ながら、１冊の本を読んで聞かせることである。親が子どもに、あるいは幼稚園や保育所等でクラスの子どもたちに読み聞かせをするイメージが強いが、最近では大人向けの読み聞かせも実施されている。

ストーリーテリング（素話）は、話し手が本のストーリーをすべて覚え、人の前で語ることである。本の内容を覚える必要があるが、話し手の語り口によって違った味わいが生まれる。

朗読は、「言葉」を大切にしながら、本を声に出して読むことである。朗読者の色々な技術によって味わい深く語ること、相手は想像力を膨らませながら一緒に本を読んでいる感覚になる。

（４）紹介文・書評

紹介文と批評（書評）については、テキス

トで以下のように説明されている⁷⁾。

「紹介文は絵本の内容、特色、魅力などを明解にわかりやすく伝えることを目的とする文章です。作者、画家、翻訳者、発行所、発行年などの書誌情報、創作の動機や背景などを示し、主題、ストーリー、構成と展開、絵本表現、テキストの内容、テキストとイラストレーションの関係などを踏まえて紹介し、その絵本の見どころを明示し、推薦理由を述べます。

批評（書評）は、絵本の紹介に加えて、評価や感想を含む文章をいいます。創作の意図や主題、特徴などを簡潔に述べます。評価や感想に説得力があるかどうかが問われます。」

どちらも、文章で絵本を紹介する方法であるが、紹介文よりも書評のほうが自身の感想や評価を含める割合が大きいと考えられる。

３．「読み聞かせ」と「ビブリオバトル」と「書評」の共通点と違い

（１）授業実践の概要

筆者は、前述のように本養成講座の「絵本を紹介する技術①・②」を担当した。以下は、その授業実践の概要である。

①2022年5月7日（土）

絵本を紹介する技術として取り上げられる「ブックトーク・ビブリオトーク・ビブリオバトル・読み聞かせ・ストーリーテリング・朗読・書評・紹介文」の方法や目的を説明した。また、伝えるために必要な知識や技術、身につく資質能力などを確認した。

今回の授業までの課題として、「ビブリオバトルで紹介する絵本を１冊準備する」、「ビブリオバトルで話す内容を考える」、「選んだ絵本について、書評を書く（300字以上）」を伝えた。さらに、ビブリオバトルのルール等、そのやり方を詳しく説明した。書評については、書くときのコツを伝えた。

②2022年7月9日（土）

4～5人グループを作り、ビブリオバトルを実施した（写真参照）。グループ全員のプレゼンテーションと質疑応答が終了した後、グループ内で投票をし、チャンプ本を決定した。その後、各自が書いてきた書評をグループ内で1人ずつ発表した。



最後に、まとめとしてリフレクションシートを記入する時間を設けた。リフレクションシートには、『①ビブリオバトルの感想、②書評を書いた感想、③「読み聞かせ」と「ビブリオバトル」と「書評」は、いずれも本を他者に紹介する方法です。これら3つの共通点と違いは、何だと思えますか？』の3点について、自由記述の形式で記述してもらった。

（2）学生のリフレクションシートから

①共通点

3つの方法の「共通点」について書かれた内容は、おおよそ以下の点である。

- ・その絵本が好きなこと。
- ・自分でも絵本の良さに気づくこと。
- ・絵本をじっくり読んでから自分の感想を伝えること。
- ・その絵本に愛着があって、他者に伝えたいという思いがあること。
- ・他者に言葉で伝えていくこと。
- ・他者に絵本の内容を伝えること。
- ・読みたくなるような内容で話すこと。

- ・他者に絵本の魅力を伝えること。
- ・どのように魅力を伝えられるかを考えること。
- ・絵本のねらいを知った上で、目的を持って広めていくこと。
- ・作者の願いや考え、そして世界観を相手に伝えること。
- ・他者と絵本のおもしろさや楽しさを共有すること。
- ・絵本を介して人と接すること。
- ・絵本にふれるきっかけをつくること。
- ・本についての世界が広がること。

以上は、以下のような流れにまとめることができる。

- その本が好きで、魅力を感じる。
- 他者にその魅力を伝えたいと思う。
- 言葉で伝えるために、どのように魅力を伝えられるかを考察する。
- 作者の思いや世界観を考える。
- 魅力を他者に伝えることで、絵本のおもしろさや楽しさを共有する。
- 絵本を介して人とのコミュニケーションが生まれる。
- 多くの絵本に触れるきっかけとなり、さらに世界観が広がる。

②違い

「共通点」を踏まえた上で、「違い」については「その伝え方である」と指摘する記述が多かった。おおよそ、以下のようにまとめることができる。

【読み聞かせ】

全てを読んで聞かせることである。直接、自分の考えを語ることはしないが、読み方（声のトーン、イントネーション、速さなど）によって、読み手が感じている絵本の価値観が反映される。

【ビブリオバトル】

自分の考えた絵本の魅力を伝えることである。絵本の内容を紹介することが主であるが、自分の魅力と感じている部分を語ることによって、おのずと自身の価値観が伝わる。絵本の内容によって、自分の考えと内容が左右されやすい。ライブ感があり、同時双方向性的である。

【書評】

自分の考えた絵本の魅力を文章にすることで伝える方法である。絵本を紹介することが主だが、ビブリオバトルよりも、自分の考え方をどこまで入れ込むかということ自体が、その人の価値観を反映させ、じっくりと考察された内容となる。ただし、ライブ感はない。

4. ビブリオバトルの特徴と他の手法との比較

(1) ビブリオバトルの特徴

筆者は2016年度から保育者養成校等の授業において、ビブリオバトルを取り入れている。授業実践に基づく研究を継続する中で、特にその「コミュニケーション機能」に着目してきた。これまでの研究で明らかになった点は、以下の通りである。

- ・ 保育者の専門性を高めるためには、「自分自身と対話する力」や「他者と対話する力」が非常に重要である。バトラーとして参加した場合、「話す」ことが中心であるものの「読む、考える、書く、話す」といった活動を総合的に組み合わせて経験することができ、基礎力を総合的に向上させることをも期待できる⁸⁾。
 - ・ バトラーの「本を紹介する」という行為のなかに見られる「自分語り」は、自己理解と他者理解が促進され、ビブリオバトルの機能のひとつである「コミュニティ開発機能」を活性化させることにつながる⁹⁾。
 - ・ ビブリオバトルの機能として、「①本を知る=書籍情報共有機能」、「②自己表現」、「③他者理解 (=自己理解)」、「④コミュニケーション」、「⑤ゲーム性」、「⑥プレゼンテーション」があげられる。そのうち、「④コミュニケーション」は、本を通して「共有信念」が増えることであり、特に質疑応答によってコミュニケーション機能は促進される¹⁰⁾。
 - ・ ビブリオバトルの「他者との相互作用によって主体的に学習していく」という考え方は、アクティブラーニング、つまり「主体的・対話的で深い学び」との親和性が高い¹¹⁾。
- 総じて、ビブリオバトルはバトラーとしても聴衆としても「主体者同士の対等な関係性において、対話を通してコミュニケーションが活発化し、それが各自の学びやコミュニティの学びへと拡散、あるいは循環していく」という流れを見ることが出来る。また、その循環を回していくモチベーションを高めるため、「ゲーム性」という要素が組み込まれている。

(2) 他の手法との共通点と違い

筆者は、ビブリオバトルの機能について、発案者の谷口の文献等を踏まえ、自身の授業実践をもとに以下の6項目に整理している¹²⁾。ここに、改めて整理したい。

①多様な本を知る機会となる（書籍情報共有・良書探索）

ビブリオバトルに参加すれば、多様な本を知るきっかけとなる。特に、テーマを設定していない場合は、様々なジャンルの本を知ることができる。また、バトラーの場合、自身

が紹介する本への理解が深まる。

②自己表現の機会となる

自分が好きな本を相手に伝えることで、おもしろさや魅力を参加者と共有することができる。

③他者理解 (=自己理解) につながる

バトラーの選んだ本や発表の仕方から、個性や人柄が垣間見える。仲の良い友人であっても、今まで知らなかった一面を知ることもある。また、発表者が選んだ本を知っていても、自分と感じ方や価値観が違う場合、他者理解が自己理解につながる。

④コミュニケーションが活発化する

質疑応答の時間に、バトラーと聴衆が双方向的なコミュニケーションをすることで、その場に直接的なコミュニケーションが生まれる。また、ビブリオバトルの後にインフォーマルな場で本について会話をしたり、後日、紹介された本を読んでコミュニケーションが生まれることもある。

⑤ゲーム性がある

ルールとして、「バトラーは時間内にプレゼンテーションをすること」、「参加者全員で投票すること」が決められている。ゲーム性があることで、より楽しくワクワク感が生まれ、モチベーションの向上につながる。

⑥プレゼンテーション力が向上する

いかに相手を引き込むプレゼンテーションをするか工夫し、実際にバトラーとして話をすることでプレゼンテーション力が向上する。

これらの機能について、他の手法（ブックトーク、ビブリオトーク、読み聞かせ、朗読、書評、紹介文）と比較していく。

「①多様な本を知る」と「②自己表現」に

ついては、すべての手法において、その機能があると考えられる。「本を紹介する技術」であるため当然のことではあるが、「自己表現」から考えれば、紹介する本が「自分が魅力を感じる本」であることがひとつのポイントである。

笹倉は、「ビブリオバトルは読者に支持されやすい本を選ぶことに主眼が置かれがちだが、それに対してビブリオトークは本の中身の良さを伝えるという視点で本選びが大切になってきます」と述べている¹³⁾。

また、子どもに対する絵本の読み聞かせは、特に自分が好きな本と認識していない場合もあるかもしれないが、絵本の内容についてよく理解し、作者の意図や絵本の構成について知っておくことで、参加者とおもしろさや魅力を共有することができる。

このように、「紹介する本の選び方」という視点からは違いも見られるが、その本に対する何らかの思いが存在することは共通している。

「③他者理解（自己理解）」は、「自分の主観をどれだけ表出するか」ということに強く影響される。ビブリオバトルを含むすべての手法において、「自分がなぜこの本を他者にお薦めしたいか」を語る上で「自分語り」の要素が含まれるからである。特に、ビブリオバトルやビブリオトークは、おのずとその本を紹介する理由を語ることが多いため「自分語り」の要素は強くなる。

笹倉は、ブックトークとビブリオトークの違いについて、「ブックトークが『客観的な』本の紹介であるのに対して、ビブリオトークは、本の紹介をわかりやすく、主観を交えながらお薦めのポイントや書評などを丁寧に説明する」としている。また、ビブリオバトルについては「紹介者の主観的な本の感想等」が多いと述べている¹⁴⁾。紹介者の主観がどの程度含まれるかは、それぞれの手法や紹介者

の個性によって違いがあると考えられる。

一方、読み聞かせやストーリーテリング、朗読は、お話をそのまま語る行為であるため「自分語り」の余地は入らないが、語り手の声のトーンや読む速さ、声色の使い方によって、同じ絵本でも違った様相を聞き手に与える。そのような意味では、語り手の個性や人柄が垣間見えると考えて良いだろう。

「書評」については、印南が「どこまで自分を出すべきか」について、次のように述べている¹⁵⁾。その媒体が、情報メディアのようなネオ書評の場合、「少なくともそれが『情報』として機能している以上は『書き手が出すぎない』ことが重要」という。しかし、続けて「別のかたちで自分らしさを表現することはできる」としている。たとえば、「『なぜ、その本を選んだのか』『その本のどこに焦点を当てるのか』などが個としてのメッセージになるから」と述べている。ビブリオバトルやビブリオトークの場合は、その点がバトルによって直接話されることも多いが、書評の場合は「どこに焦点を当てて紹介するか」自体が書評家の個性となって現れると理解できる。

『認定絵本士養成講座テキスト』によると、紹介文は「本の内容、特色、魅力を明解にわかりやすく伝えることを目的とする」とあり、書評は「紹介に加えて、評価や感想を含む文章」とある¹⁶⁾。ただし、前述の印南の指摘を踏まえれば、どちらも書き手の個性は現れるものであり、媒体の性格や対象読者によって、その現れ方に違いが生じると考えることができる。

「⑥プレゼンテーション力」については、「話す方法」であるビブリオバトル、ビブリオトーク、読み聞かせ、ストーリーテリング、朗読のすべてにおいて求められる力である。実践することにより、プレゼンテーション力を向上させる一助となると考えられる。

一方、「書く方法」である紹介文や書評の場合は、「人前で話す」という形でのプレゼンテーションはしない。しかしながら、本の内容を要約する力、自分の考えが相手に伝わるように書く力、基本的な文章の書き方などの知識やスキルが求められる。

「④コミュニケーションが活発化する」や「⑤ゲーム性」は、次節以降で考察する。

5. コミュニケーションツールとしての視点から

(1)「話して」伝える技術

1人が集団に対して「話をする」時、それは話し手が聞き手に一方的に話をするわけではない。それは、ここで取り上げるブックトークやビブリオバトル、読み聞かせだけではなく、授業や講演会などでも同じことが言える。話し手は、聞き手からの視線やうなずき、身体から発せられるメッセージを受け取りながら話を進めるものである。

ブックトークやビブリオバトルなどでも同様である。たとえば、ブックトークに関しては蔵元が『ブックトークで心のキャッチボール』のなかで、教師が子どもたち一人ひとりの心と向かい合うために子どもの本を読んだり、クラスの子どもの心の交流をするために読み聞かせやブックトークを実践したりすることの重要性を示している¹⁷⁾。また、『ブックトークのきほん-21の事例つき』において、松岡享子は「ブックトークも、単なる職業上の技能と見るのではなく、ひとりの本を好きな人間が、別の人間にその気持ちを分かち合おうとする行為としてとらえたい」¹⁸⁾と述べている。

ビブリオバトルに関しては、発案者である谷口忠大が、そもそもビブリオバトルを「コミュニケーションゲーム」として発案している。「人を通して本を知る。本を通して人を知る。」のキャッチコピーに示されるように

「本を他者に紹介する」という行為の中には、単に「良書を知る」ことだけでなく、自立した主体同士のコミュニケーションが活性化することをも目指されている¹⁹⁾。

絵本の読み聞かせに関しては、「絵本を子どもに読む」という行為が、「話し手」と「聞き手」と「絵本」の三項関係で成立していることに注目すべきである。対象に対する注意を他者と共有する行動である共同注視は、言語獲得の基盤として必須なものとされている²⁰⁾。言語の獲得は、お互いのコミュニケーションを加速させるであろう。松井直は、絵本の意味や役割について『『読み手』と『聞き手』が言葉の喜びを『共有(Share)すること』に、絵本の最も大切な意味と役割がある²¹⁾と述べている。そして、イギリスで発案されたブックスタートのキャッチフレーズが「Share books with your baby!」であることに言及している。また、野見山は、乳児への絵本の読み聞かせに関する研究を概観し「乳児への読み聞かせが指さしなどの伝達意欲を高めることから親・保育者とのコミュニケーションの発達を促すこと」を明らかにしている²²⁾。

ストーリーテリングに関しても、山田は「お話会」の実践から「語り手はお話を耳に届けるだけでなく、目を見て語ることでアイコンタクトもとっている」と述べており、お話は「語り手と聞き手がお互いに働きかけて作っていくもの」であることを示している²³⁾。

これらの点から、「話して伝える技術」は「絵本」を媒介にしながら、話し手と聞き手がコミュニケーションを図っている要素が含まれていることがわかる。

(2)「書いて」伝える技術

書評や紹介文は、ほとんどの場合、書く人と読む人との間に時間的・空間的な距離がある。筆者の授業実践の中では、グループ内で自分が書いた書評をグループメンバーに読む

という活動を行ったが、それは授業内での活動である。一般的に書評は、新聞や雑誌、Web上などに掲載されることが多い。書き手と読み手の間の距離があっても、書評家と言われる書き手は、どのようなことに配慮して書評を書いているのだろうか。

印南は『書評の仕事』のなかで、書評を書く際に「読者ターゲットを見極めることがなによりも大切」と述べている。そして、書評家としての視点として以下の6つを羅列している²⁴⁾。

1. 読者は、なにに興味を持っていて、なにを知りたいのか。
2. 読者が知りたがっていて、でも知らないことはなにか。
3. 多くの読者は、(仕事において、プライベートにおいて)どのようなことで悩んでいるのか。
4. どのような情報に、それらを解決する力があるのか。
5. そのトピックに対し、個人的に関心を持てるか。
6. そのトピックに共感し、多くの人に広めたいと思うか。

これらの視点は、「読者のターゲットを見極め、読者の興味や悩みを想像し、書評がそれらを解決する力となり得るか。自分自身の興味関心もそこにコミットしていけるか」といった「マスコミュニケーション・ビジネス」としての書評家であるからこそその考え方である。ただし、そこから見えてくるものは、書評とは「自分の自己主張」ではなく「間接的な読者とのコミュニケーション」から生まれるということである。

筆者は、授業実践の中で、書評の書くときのコツとして「どのような場で、誰に紹介するか」を想定してみるよう伝えた。たとえば、「園だよりで、保護者向けに」、「園内研修で、同僚向けに」、「子どもへのおたよりで、子

ども向けに」などである。直接ではなくても、そこには書き手と読み手のつながりが存在しているのである。

6. 「絵本を紹介する技術」の獲得が目指すもの

ここまで取り上げた“絵本を紹介する様々な方法”は、「絵本の内容や魅力を伝える」という点では共通している。そして、そこに「伝えたい思い」があることが大前提であることも共通している。もちろん、紹介する「話し手や書き手」と「聞き手や読み手」とのコミュニケーションの双方向性という視点から考えれば、「話す」方法は直接的な双方向がその場でリアルに行われるが、「書く」方法はマスコミュニケーションとして一方的な側面も持つ。このように、コミュニケーションの方法は違っていても、そこには話し手や書き手の「絵本のおもしろさや魅力を伝えたい」という思いが根底に存在している。

「伝えたい思い」は、その絵本のどこかに魅力を感じるからであるが、「魅力を感じた部分」は、絵本の内容でも、作者の意図でも、絵本の構成でも、絵本の形でも良いのである。魅力を感じた部分が、話し手や書き手の個性となって現れる。絵本を深く読解し、作品の背景を知ることが、魅力を感じた部分を深めることに寄与するであろう。また、それは「話し手や書き手から、一方的に伝えるだけ」ではない。魅力を伝えたい相手とのつながりを求めて「伝える」のであり、そこにコミュニケーションが生まれる²⁵⁾。

そして、そこには「自分の思いを伝える」、つまり自己の主観を相手に伝えることで、ある程度の自己開示が求められる。そして、自己開示をするためには、「絵本」を媒介として、人と人々が人間として互いにその思いを尊重し、対話をする姿勢が大切である。

そのような空間には、心理的安全性ともいえるべき安心感のある空間が保障されていなか

ればならない。筆者は、昨年度行ったビブリオバトルの授業実践の際に、学生にアンケートを書いてもらっている。ビブリオバトルを経験しての自由な感想の中には「人やクラスの前で話すことが緊張した」という学生の意見が見られた。このことから「人前で自分自身のことを話すこと」、つまり自己開示に対する緊張感を軽減するための環境設定が配慮されなければならないことがわかる²⁶⁾。それは、アクティブラーニング的な活動においては必要な要素ともいえる²⁷⁾。

また、松尾も、ビブリオバトルの授業実践について「自己理解に加え自己開示を伴う」ことに言及している²⁸⁾。そして、「自己開示は、一定の信頼関係があってこそ可能になる」ため「子どもたちの信頼関係の状況を把握したうえで実施する必要がある」、「どうしても自己開示をしたくない子どもも存在すると思われるため、その対応も事前に考えておく必要がある」と述べている。

つまり、心理的安全性が保障され、安心して自己開示できる空気感と、自己開示をしない部分をも尊重できる空気感が存在しなければならないのである。「自分をどこまで出すか」は、その状況や手法に大きく影響されるものであるが、その探り合いや葛藤も含み込み、少しずつ「私」を出していく過程を保障する環境が前提となる。その心理的安全性を保障するひとつの方法が「本を紹介する」という行為を通して無理なく作られ、そこにゲーム性を加えたのが「ビブリオバトル」であり、テーマ性を持たせたのが「ブックトーク」や「ビブリオトーク」である。

特に、「話す」方法は、フェイストゥフェイスの直接的なコミュニケーションであり、話し手にとって緊張する場面でもある。自分自身の自己開示を「聞き手が、どのように受け止めるのか」が未知数だからである。そのため、「話し手と聞き手との対等な関係性」が前提としてなくてはならず、その前提を前

提とするための手段として、たとえば、ビブリオバトルの「公式ルール」があるのであろう。公式ルールの詳細には、ディスカッションの場が「参加者全員が、お互いにとって楽しい場となるよう配慮すること」が明記されている²⁹⁾。

このように、話し手と聞き手との個性が相互に尊重され、主体と主体との対等な関係性における「対話」がなされるとき、そこに人間の人の柄や個性が垣間見える。そして、そのような積み重ねこそが、真の意味での対話やコミュニケーションを支えるのではないだろうか。

「絵本を紹介する技術」は、話術、話し方、間の取り方、話す内容の吟味、書く力、伝える力等のスキルが必要である。しかし、「相手とつながりたい」という気持ちがなければ、一方的な押し付けになってしまう。「つながりたい」からこそ、相手をよく知ろうとする。「絵本を紹介する技術」は、そのために用いるものでなければならない。

【引用文献】

- 1) 認定絵本士養成講座 | 独立行政法人 国立青少年教育振興機構
<https://www.niye.go.jp/services/plan/ehon/nintei.html> (2022年9月20日取得)
- 2) 絵本専門士委員会課程部会認定絵本士養成講座テキスト作成ワーキンググループ編『認定絵本士養成講座テキスト』絵本専門士委員会 独立行政法人国立青少年教育振興機構、中央法規、2020年、pp.108-119
- 3) 新井悦子「専攻科『児童文化研究』における幼児向け絵本のブックトークの実践研究」『長崎短期大学研究紀要』33号、2021年、pp.79-88
- 4) 谷口忠大『ビブリオバトルー本を知り人を知る書評ゲーム』文藝春秋、2013年、pp.155-156
- 5) 知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト <https://www.bibliobattle.jp/> (2022年9月20日取得)
- 6) 笹倉剛『テーマ別のビブリオトークー子どもの読書は「量より質」の時代へ』あいり出版、2016年、p.1
- 7) 絵本専門士委員会課程部会認定絵本士養成講座テキスト作成ワーキンググループ編、前掲書、p.117
- 8) 綾牧子「保育者養成の専門性につながる国語表現力の育成に関する一考察」『彰栄保育福祉専門学校研究紀要』37、2022年、pp.3-12
- 9) 綾牧子「ビブリオバトルの実践による学生の変化ー『自分語り』に焦点を当てて」『彰栄保育福祉専門学校研究紀要』36、2021年、pp.3-9
- 10) 綾牧子「保育者養成におけるビブリオバトルの継続的な実践による意義」『文教大学教育研究所紀要』第29号、2020年、pp.39-50
- 11) 綾牧子「アクティブラーニングの授業計画における留意点」『文教大学教育研究所紀要』第25号、2016年、pp.31-41
綾牧子「保育者養成におけるビブリオバトルを取り入れた授業実践」『文教大学教育研究所紀要』第27号、2018年、pp.147-154
- 12) 綾牧子「保育者養成におけるビブリオバトルの継続的な実践による意義」前掲書、p.40
- 13) 笹倉、前掲書、p. i
- 14) 笹倉、前掲書、p. i
- 15) 印南敦史『書評の仕事』ワニブックス、2020年、pp.31-33
- 16) 絵本専門士委員会課程部会認定絵本士養成講座テキスト作成ワーキンググループ編、前掲書、p.117
- 17) 蔵元和子『ブックトークで心のキャッチボール』学事出版、1996年、p.45など

- 18) 松岡享子「ブックトークの意義とその効果的方法」、東京子ども図書館編『ブックトークのきほん—21の事例つき』東京子ども図書館、2016年、p.7
 - 19) 谷口忠大、前掲書、p.108など
 - 20) 小椋たみ子「絵本場面における母子共同注視と子どもの言語発達」、2019年4月19日掲載、Webページ「CHILD RESEARCH NET」、<https://www.blog.crn.or.jp/lab/09/11.html>（2022年9月20日取得）
 - 21) 松井直『絵本は心のへその緒—赤ちゃんに語りかけるといふこと』NPOブックスタート、2018年、p.33
 - 22) 野見山直子「乳児への絵本の読み聞かせに関する研究動向」『彰栄保育福祉専門学校研究紀要』35、2020年、pp.11-19
 - 23) 鈴木守、山田いづみ「地域におけるお話し会とストーリーテリング—おはなしつむぎの会の活動から—」『常葉大学教育学部紀要』第42号、2022年、pp.1-15
 - 24) 印南敦史、前掲書、pp.72-74
 - 25) コミュニケーションとは、大辞泉によれば「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語・文字・身振りなどを媒介として行われる」とある。
 - 26) 綾牧子「ビブリオバトルの実践—コミュニケーション機能からの分析」文教大学教育研究所 第100回定例研究会における発表資料、2022年8月11日
 - 27) 綾牧子「アクティブラーニングの授業計画における留意点」前掲書において、アクティブラーニングを進めていく際に「学習者個々への配慮が必要であること」、「ビブリオバトルが、そのアクティブラーニングの困難性を乗り越えられる要素を持っていると考えられること」を示した。
 - 28) 松尾由希子「自己理解・他者理解を深めるための特別活動のオンライン授業開発：『主体的・対話的で深い学び』を目的としたビブリオバトルをベースに」『静岡大学教育研究』静岡大学大学教育センター、2021年、p.155
 - 29) 知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト <https://www.bibliobattle.jp/rules>（2022年9月20日取得）
- 【引用文献以外の参考文献】**
- 【ブックトーク】**
- ・全国SALブックトーク委員会編『ブックトーク—理論と実践—』全国学校図書館協議会、1990年
 - ・学校図書館問題研究会「ブックトークの本」編集委員会編『ブックトーク再考—ひろがれ！子どもたちの「読みたい」「知りたい」』教育史料出版会、2003年
 - ・岡本健「リアルイベントの効能—『ユニバでブックトーク』から『“オール近大”新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト』まで』『香散見草：近畿大学中央図書館報』No.53、2021年、pp.8-11
- 【ビブリオバトル・ビブリオトーク】**
- ・太田真理「コロナ禍におけるZoomを使用したビブリオバトル授業の実践と考察」『清泉女子大学人文科学研究紀要』第43号、2022年、pp.92-76
 - ・笹倉剛「ビブリオトークの新しい可能性を探る—『ビブリオ漫談』の実践を通して—」『神戸親和女子大学言語文化研究』13号、2019年、pp.41-66
- 【読み聞かせ】**
- ・杉上佐知枝『絵本専門士アナウンサーが教える心をはぐくむ読み聞かせ』小学館、2020年
 - ・原田義則「言葉の獲得を促す幼稚園カリキュラムの研究：読み聞かせに着目して」

『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育実践
編 特別号』 1、2022年、pp.1-15

- ・古橋真紀子「伝えたい思いがどの子にも育つ保育環境－絵本を題材としてやり取りをする保育の可能性－」『目白大学 総合科学研究』 第16号、2020年、pp.135-140

【ストーリーテリング・素話】

- ・浅木尚実「ストーリーテリング（お話）と国語教育『話す力』『聞く力』養成～教員志望学生のコミュニケーション力向上に関する考察～」『淑徳短期大学研究紀要』 第53号、2014年、pp.53-67
- ・松山鮎子「口演童話の学校教育への普及過程－社会活動における教師の学びに着目して－」『早稲田大学大学院教育研究科紀要』 別冊18号－ 1、2010年、pp.79-88

【紹介文】

- ・大西光恵「保育者として伝えたい〈言葉〉を意識して書く本の紹介文作り－言語活動における保幼小の学びの連続性をふまえて－」『関西保育福祉専門学校 研究紀要』 第6号、2019年、pp.15-22